

cafe talk_06

06号の制作に関わったクリエイターと、enocoスタッフによるカフェトーク。
スタッフの予想を裏切るデザインが仕上がってます。

ゲスト 三重野 龍さん グラフィックデザイナー



三重野 龍

1988年生まれ。2011年に京都精華大学グラフィックデザインコース卒業後、京都にてフリーランスで仕事を始める。ペイントユニット「uwn! (うわん!)」の一員として活動し、FREE MAGAZINE「AT PAPER.」のデザインを担当。2013年よりパフォーマンスグループ「MuDA(ムーダ)」加入。今までなんとか生き延びている。
<http://mienoryu.com>

—— 今回、芝生でポートレート撮影を敢行したりしたので、デザインも爽やか路線かな、と実は勝手に予想していました。

三重野 お二人が芝生で相撲取ってるところを撮ってみたんですけど、結局使いませんでしたね…。お二人に対する僕の主観というかイメージの影響が大きいデザインなんんですけど、今回は許してもらえるんじゃないかなと(笑)。日ごろ(井上)信太さんと一緒に活動している割には、ワークショップについてはちゃんと話を聞いたことがなくて、この機会に頭の中を覗く感じでスライスしてみたらおもしろいかもと思ってこんな感じになりました。表紙もそのイメージに引っ張られてますね。

—— デザイナーでありながらパフォーマーとしても精力的に活動されている三重野さんですが、普段の生活はどんな感じなんですか？

三重野 朝10時くらいに起きて自宅でデザインの仕事をして、夕方6時から稽古に行って、23時ごろに帰ってきて、また朝の5時くらいまで仕事をするという感じですね。週4で稽古してるので、なかなかハードな日々です。夏には別府の「混浴温泉世界」にMuDAとして参加予定です。

ninOval cafe

enoco地下1階 営業時間:11:00-18:30 (月曜日定休)

enoco地下のカフェが、サンドウィッチャフェにリニューアル！
7月21日、ninOval Cafeが『cafe Oval』としてリニューアルオープンします。パンケーキカフェ新店舗は、西区立売堀(現店舗から東へ徒歩10分、阿波座駅4番出口より徒歩5分)に7月25日移転オープン予定。どちらもぜひご期待下さい。



enoco
enokojima creates osaka

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]
Enokojima Art, Culture and Creative Center,
Osaka Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

〒550-0006 大阪市西区江之子島2丁目1番34号

開館時間:10:00~21:00(ただし展示室は11:00~19:00・日曜日は11:00~16:00)

月曜・年末年始休館

電話 06-6441-8050 | FAX:06-6441-8151

メール art@enokojima-art.jp

www.enokojima-art.jp

enocoニュースレター 06

2015年7月発行

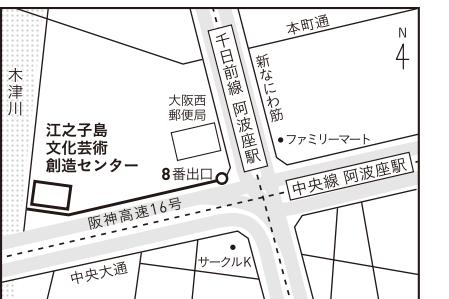
「enocoニュースレター」は、enocoが年4回発行する情報誌。enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

|発行|大阪府立江之子島文化芸術創造センター |編集|峯恵子(enoco企画部門)

|表紙・特集ページデザイン|三重野龍

|アートディレクション|後藤哲也(OOO Projects)

|イラスト(エノケン、似顔絵)|タダユキヒロ



アクセス
大阪市営地下鉄千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。



06号の表紙 デザイン 三重野龍

江之子島文化芸術創造センター enoco がお送りする「enoco ニュースレター」。表紙と巻頭は、毎号異なる関西のクリエイターたちが担当します。06号ではアーティストとコーディネーター、それぞれの異なる立場から「ワークショップ」についてお話を伺います。気鋭の若手デザイナー、三重野龍さんによるグラフィカルなインタビューページのデザインにあわせて、表紙では「enoco」の文字が輪切りにされています。輪切りにされた文字は何故かかっぱ巻き、そして薬味の菊の花が散らされています。夏です。
<http://www.enokojima-art.jp/>

進化するワークショップ[°]

現在、美術館、公共施設、または教育の現場だけではなく、さまざまな場面で出会う「ワークショップ」という言葉。「Workshop（仕事場、工房）」という英語を語源としていますが、一方通行的な知や技術の伝達でなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学びあい、つくり出す、双方向的な体験型講座のことを指す言葉として、近年では広く一般に定着しています。

enoco でも継続的にさまざまなタイプのワークショップを開催していますが、なかでも多くの方に親しんでいただいているのが、アーティストを講師に招いてのアート・ワークショップです。

今回は、enoco のアート・ワークショップに関わっていただいている美術家の井上信太さん、音楽家・コーディネーターの小島剛さんに、ワークショップを通じた新しい創作のかたち、学びのかたちについてお話を伺います。

お二人にとって「ワークショップ」とは？

井上：美術家として活動をしている僕個人の話をするとき、自分ひとりで制作とは全く別の形態をつかった新たなアートワーク、制作活動としてワークショップを捉えています。昔からよくイメージされてきたワークショップって、絵の描きかたを教えたり、ものづくりのスキルを伝える教室のようなものが多くたんじゃないかなと思います。でも現在、ワークショップもどんどん進化していて、ダンス、音楽、映像や照明があったり、衣装を作ったり、といったことも含めて、これまでの枠組みを広げるようなワークショップが増えているんです。僕自身もこれまで手掛けてきたワークショップのなかで、色々な人とアイデアを持ち寄ることや、大勢でひとつの形を作っていくこと、人との新しいつながりができるということが本当に楽しくて、自分の領域から超えて行くような感覚があったんです。ワークショップをディレクションするということは、空間、時間を表現すること、つまり舞台で演出することと似ています。ある種の演出することで人は動いてくれるし、それぞれの時間、空間の中で自由にやってくれる。そこにはみんなでひとつの空間を作り上げるために演出をするという行為が、僕にとっての次なる新たな制作活動の形といえるかもしれません。ただし、もちろんワークショップをやらないアーティストもたくさんいるので、本当に人それぞれで一概には言えませんが。

小島：僕自身も、サウンドアートの分野に長く関わっていたのですが、実はもともとワークショップをあまりやらないというか、好きじゃなかった。アーティストと参加者、それぞれの自己満足でしかないと思い込んでいたところがあって、むしろライブをやったり、展覧会を企画するほうがずっと面白いし意味があると思っていたんです。ところがある時、拠点としていたスペースが急になくなってしまい、なんとなく目的を見失ってしまうということがあったんです。関わっていた文化事業やNPOの活動も一旦やめて、なにか別のことをしてみようと思って、今も所属している、子どものためのキャリア教育を行う団体に参加して、特に小学生向けに「働くこととは何ぞや」というのを連続ワークショップの中で体感してもらうという活動を始め、そこからの流れで、教育現場でアートプロジェクトを展開するという大阪市の事業の一環で、鑑賞型ではない、子どもたちが参加できるワークショップをコーディネートするようになります。その中で徐々に、ワークショップの役割として最も大切なのは、実は内容がどうこうということではなく、子どもが社会に出たときの耐性みたいなものを子供のうちから身につけておくことかもしれないとだんだん気づいていきました。多様な表現や技術を知るということはもとより、アーティストをはじめとする色々なタイプの人が学校に来ることであったり、（井上さんを

見ながら）「こんなワケわからんおっさんが世の中にいてる！」というのを子どもたちに見せるということがどれだけ意味があるのかということが、よく分かってきたんです。そのとき、社会の中でアートをやっていくことの目的がはっきり見えた。子どもたちにアーティストが刺激を与えるというかお尻を叩いてあげることで、「こんな表現のしかたがあるんや」とか、「こんなことができんの！」とか、「今までできひんと思ってたことができた」とか、自分や社会の色々な可能性に気づくことができる。そういう表現がワークショップの現場にはあると思ったんですね。

アーティストの能力、コーディネーターの役割

井上：例えば学校でワークショップをする場合、もちろん何をどういう段取りでするかということも大切ですが、先生たちや保護者の方たち、参加者のまわりの人たちとどれだけ連携を取れるか、どれだけ主体的に関わってもらうかをしっかり整えるということが本当に大事だと思います。学校のカリキュラムにどう関わるかというところでも、コーディネーターのしかたが鍵になってくる場合がある。また僕はこの先、隠岐島と小豆島、屋久島でワークショップをする予定があるんですが、コミュニティが都市部よりしっかりしている分だけ余所者が入りにくかったりもして、コーディネーターの仕方が全然違ってくる。とりあえず人づてに色々探して、島に住んでいる方に仲介をお願いしたりもする。一緒に仕事をするコーディネーターというのは本当に重要なんです。

小島：アーティストと参加者の間に立つ僕らコーディネーターが、どこで誰を対象にして、どういう人を巻き込むか、地域の人たちとどう結びつくことができるかをまずしっかり考えないとダメなんですね。また参加した人のフィードバックをしっかりと、次の展開につなげるという作業もあります。そういう意味では、アーティスト任せではなく、コーディネーターが一緒になって、参加者にどれだけ主体的に関わってもらうかを考える必要があります。そういう場所でワークショップをするのであっても、関わる人たちをどれだけ巻き込めるかっていうのが大事です。

井上：事前の下準備は完璧にする必要があるんですよね。一方で、その場その場に合わせて、参加する人たちにとって最適な方法を瞬時に判断する、見つけるというのは、僕らのようなアーティストが持っている特別な能力だとも思っています。例えば子どもとワークショップをすると、お母さんと離れたくない子やそもそも乗り気じゃない子、本当に色々な子がいるけれども、その場に合わせてベストな方法を考える。終わった後は本当にへトへトです。でも僕らが思いがけないアイデアを出すことによって、参加者にとってもアイデアを出しやすい状況を作ることができると感じます。さらに、僕らが帰った後でも、アイデアの出しかたを学んだことであったり、コミュニティの中で新しくできたつながりがきっかけとなって、新たな活動が生まれていくというのが理想です。

例えば大分でワークショップを行った学校的な先生から、「6年生が卒業式を自分たちで作りたいと言っているんですが、井上さんどうしましょう…」という電話がかかってきたことがあります。そのときは、「失敗してもいいから好きにやってみるのが一番。見守ってあげましょう。」とただ励ましたんですが、僕にとってはこれこそがやりたかったことだという実感がありました。しかもその後、大成功したという連絡もあって本当に嬉しかったです。でも実際のところは、新しいものを作りたい、試したいことを思いついたら止められないのがアーティストの本能の

井上信太

1967年大阪府生まれ。
京都精華大学卒業後、和太鼓奏者として約100カ所のヨーロッパ劇場公演に参加。その後、舞台、照明、美術監督としてブラジルツアーや参加。1998年より羊飼いプロジェクトを中心に、国内外で多数の展覧会を行う。近年は多領域のアーティストとのコラボレーション、劇場、茶室、能舞台などで新しい平面構築の可能性を探るほか、全国の小学校などで「ふしぎなワークショップ」を開催する。2010年にMuDA結成。

京都精華大学非常勤講師、京都橘大学非常勤講師。

ようなものなので、現場ではそこまで先の展開をあまり細かく考えず、その場その場の化学変化に合わせて全力でやっているだけという感じです。

小島：きっとアーティストの仕事としては、それで良いんだと思います。コーディネートをする僕らが、社会や美術の流れだと、アーティストの考えていることを敏感にキャッチしていかなければならぬし、ある程度カテゴライズをしながらうまく外に働きかけることが必要です。そうすることでアーティストとはどんな能力をもった人たちなのか、社会の中でどんな力を持っているのかということがより伝わりやすくなるはず。アーティストの仕事を一般の人たちにわかりやすく見せていくのも僕らの仕事ですよね。

社会の中のワークショップ

井上：美術が日々進化しているのと同じで、アート・ワークショップも進化しています。例えば額縁に飾られた絵だけが美術なのではなくて、インスタレーションや映像作品、パフォーマンスもそうですが、**美術として捉えられるものや事柄自体もどんどん拡張していますよね。**だから僕の場合は、僕なりの新たな方法論で、ワークショップを通して自分のアートワークを作ろうと思っている。例えば「ポスト・ワークショップ」と呼んでしまうことで、もしかしたら新しいものが生まれる可能性だってあるかもしれない。ワークショップという言葉 자체をなくすことだってあり得ると思う。

小島：井上くんが「ポスト・アート・ワークショップ」って言っている意味は本当によく分かる。**参加者の子供に向けてやってるようで、実は巻き込まれる大人も作る側に引き込んで全体の流れを作ると考えれば、「ポスト」と呼べるかもしれない。**作品を作るのではなく、そのプロセスを大事にする考え方ですね。ソーシャルビジネスの世界でも、プロセス重視の考え方方が広がってきてるというのを聞きました。今年度からenocoでやっている「オヤトコエノコ」というプログラムでは、子どもがアーティストと一緒に作品をつくるだけではなく、学校以外のコミュニティとして親子、子ども同士、親同士のつながりを作ることができないかという取り組みです。そこに「ポスト・アート・ワークショップ」の考えを取り込んでいるのではないかと思いますね。

井上：社会や地域との関わりかたで考えれば、僕たちがやろうとしていることを「アート・ワークショップ」という言葉でひとくくりにすることすらもはや難しくて、もしかするとアーティストがやる範囲をすでに超えてきているかもしれない。町にデザイナーが入って例えば商店街を盛り上げるとか、そういうものと似ているのかもしれない。僕が経験した中でも、たくさんのボランティアの人たちに関わってもらってワークショップを行ったことで、学校や施設が地域に出ていくきっかけができるということもあります。そして対象は必ずしも子供や学校だけじゃなくても良い。企業を対象にしたもののはすでにありますし、例えば政治家の方が対象でもいいと思うんです。**教育の現場で子どもたちの目の輝きがみる**みる変わることろをたくさん見てきました。子ども以外の世代に対しても、同じことは起こるはずだし、まだまだいろんな可能性があると感じます。enocoのまわりにも、アーティストや美術が好きな人たちだけでなく、デザイナー、建築家、まちづくりに関わる人たちも含めて色んな人がいると思うから、地域を巻き込みながらまた何か面白いことやりたいですね。



enocoで行われているさまざまなアート・ワークショップ

タチョナ × enoco 子どもアートワークショップ

NPO cobonが手がける、子どもたちがアートに触れ体感する様々なプログラムを提供するプロジェクト「タチョナ -Touch On Art-」と協働で展開しているワークショッププログラム。アートの多様性に触れながら、自他の理解を深めることで自己肯定感を向上させ、子どもたちの将来に向けての社会的自立をうながす。



子どもアートワークショップ vol.7 「?を自動販売機で売ろう!」(2013.4.~8.)
※講師：米子 匡司

タチョナ × enoco 子育て支援プログラム オヤトコエノコ

親と子がそれぞれかかわり合いながら作品を作り上げるワークショッププログラム。親が子どものサポートにつくのではなく、同じワークでも別々に取り組み、あらためて共有し、ひとつの作品を完成させる。同時に、その場で出会った子ども同士、親同士が新しい関係を結ぶきっかけづくりも行う。



オヤトコエノコ「モシモ人形」を作ろう！～ワタシのボクの分身人形(2015.2)
※講師：菊川法子(立体イラストレーター)

DECO × enoco 壁面プロジェクト

江之子島を中心に、暮らしをアートなどで彩り、住民同士の楽しいつながりを生む取り組みを行なっていきます。「アート＆ライフ スタイル」の実現を目指すプロジェクト、DECOと連動したプログラム。公共空間に子どもたちとアーティストが制作した作品を媒介に、地域住民同士のつながりがゆるやかに生まれていく場となることを目指す。



江之子島壁画プロジェクト「ふしぎなenoco島をつくろう！」(2013.12.-2014.4.)
※講師：井上信太(美術作家、アートディレクター)、海上梓(アニメーション作家)、
小島剛(音楽家)、井上サトシ(音楽家)

アートフォーラム「<子どもとアート>の現場を考える」

展覧会づくりや対話鑑賞などの子どもも向けワークショップと、シンポジウムやレクチャー、ディスカッションなどの大人向けプログラムの2部制で開催。「子どもとアート」の関わり方についての議論と意見交換の場をつくるとともに、実際に現場で「子どもとアート」に関わる人々同士の関係構築を行う。



※大阪新美術館建設準備室との共同事業
ワークショップ「みんなで美術館をつくるよ！」(2014.2.)



これからのイベント情報

各イベントの詳細・申し込み方法はホームページをご覧ください。

みんなでつくる夏休みだけの映画館!?

-アートでつなぐ、みんなの実験場- えのこじま仮設映画館

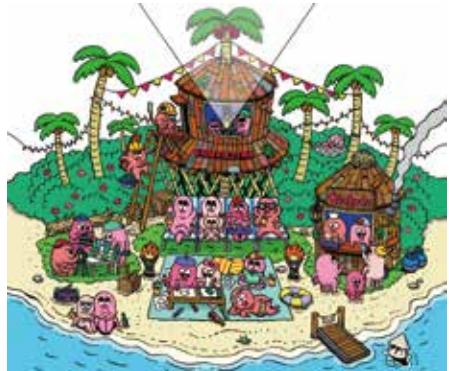


イラスト:タタユキヒロ

夏休みの間だけまぼろしのように現れる「えのこじま仮設映画館」。ギャラリー空間の中に、仮設の映写室、シアター、実験ラボがつくられ、映画をみたり、つくりたり、おしゃべりしたり、もちよったり…。大人も子どもも、さまざまな世代が交流しながらつくり、学び、映画や映像を介して自由に楽しむことができる実験場です。参加アーティストやイベント情報は随時追加予定。ぜひお見逃しなく。

ー

|つくるinラボ|

映画・映像づくりのさまざまなメソッドで日替わりワークショップを開催。完成した作品は会場横のシアターで上映が可能。(毎週火～金曜日 11:00～19:00 無料・随時参加可能)

|みるinシアター|

えのこじま上映会(ラボでつくった映像作品を上映する。※毎週火～金曜日11:00～19:00)／妄想映画祭(観たい映画のアイディアを持ち寄り、架空の映画祭をつくる。)／ご近所映画祭:(3時間で映画をつくるプログラム「ご近所映画クラブ」の映画の上映を行う。※8/22開催予定)ほか

|空間設計|アトリエカフエ |企画協力・プログラムコーディネート|岩渕拓郎 |協力|協力:キネプレ、一般社団法人タチヨナ、remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織] |助成|大阪市

期間:2015年8月1日(土)～30日(日)※月曜休館

時間:11:00～19:00

場所:大阪府立江之子島文化芸術創造センター 1階ルーム4

入場料:無料(一部有料プログラムあり)

「創造思考で未来を変える」

enocoの学校 ソーシャルデザイン入門コース 第3期受講生募集!



SEEING AND PRACTICING enoco[study?] #2 適合性と行動
展示風景 (撮影:橋本琢磨)

アーティスト・サポート・プログラム

enoco[study?]#3 公募開始



Osaka Creative Forum 2015 新しいパブリックのつくり方



enocoプラットフォーム形成支援事業では、公共空間の利活用、地域の活性化、街づくりなど、単独の部局だけでは解決が困難な複合的な行政課題に対して、アーティストやデザイナー、府民、専門家などの多様な立場の組織や人が、“プラットフォーム”を形成し、行政主導ではなく、対等な立場で交流・対話を行い、アートやデザイン等をツールとして、解決策を検討し提案する官民共同の体制づくりを支援しています。これまで、ブライアント・パークなどニューヨークのBID(ビジネス改善地区)に関わってこられたノーマン・ミンツ氏や、シンガポール川周辺エリアの都市再生計画に携わっておられるエリザ・チュウ氏をパネリストに迎えて開催してきた「Osaka Creative Forum」。

今回は、公共空間の画期的な活用、運用等で注目を集めるゲストを迎え、「新しいパブリックのつくり方」をテーマに議論していきます。1日目にはそれぞれの分野でご活躍されている方々から、実例を交えつつお話を伺います。さらに2日目にはその発展形として、気になる点をさらに追及していきます。日頃から抱えている具体的な悩みや疑問に対して専門家からアドバイスを受けることのできる時間も設ける予定です。

ー

開催日・会場:

2015年9月4日(金)大阪市中央公会堂3F小集会室

2015年9月5日(土)enoco1Fルーム4

|パネリスト(予定)|

馬場正尊(Open A代表／東京R不動産ディレクター／東北芸術工科大学准教授)、忽那弘樹(大阪府立江之子島文化芸術創造センター プラットフォーム部門チーフディレクター／株式会社E-DESIGN代表取締役)ほか(順不同)

エキシビションカレンダー 2015年7月 - 9月

月	会期	展覧会名	ルーム
7	7日(火) - 12日(日)	ヴァンヌーボ×15人の写真家展	[ルーム4]
	9日(木) - 10日(金)	Brilliant world ~Miyuki~展	[ルーム2]
	21日(火) - 26日(日)	大阪二紀展	[ルーム1,2,3]
	21日(火) - 26日(日)	第12回 大阪独立作家展	[ルーム4]
8	7/28日(火) - 8/23日(日)	「浮田要三の仕事」展	[ルーム1,2,3]
	1日(土) - 30日(日)	えのこじま仮設映画館	[ルーム4]
	8日(火) - 20日(日)	BELA PRINT展	[ルーム1,4]
9	22日(火) - 27日(日)	日本水墨画大賞展	[ルーム1]
	22日(火) - 27日(日)	高杉悦生個展	[ルーム3]
	22日(火) - 27日(日)	JRP大阪支部写真展	[ルーム4]
	29日(火) - 10/4日(日)	吉田修二 井上和雄 それぞれの個展	[ルーム1]
	29日(火) - 10/4日(日)	姜流民画教室作品展	[ルーム4]

くわしくはホームページをご覧ください <http://www.enokojima-art.jp/>

PICK UP



「浮田要三の仕事」展

会期 | 2015年7月28日(火)-8月23日(日)

11:00~19:00(最終日は16:00まで)

※月曜休

場所 | 4Fルーム1~3

入場料 | 無料

主催 | 「浮田要三の仕事」展実行委員会

井上靖・竹中郁・坂本遼などの企画による《きりん》という子どものための詩と絵の雑誌の編集・発行に青春の情熱を注いだ浮田要三(1924~2013年)。《きりん》の表紙の絵の依頼を通じて「具体美術協会」の代表である吉原治良と出会い、自らも絵画を描き始め、具体的な画家として活躍しました。《きりん》はenocoからほど近い西区本田にある浮田の実家にて編集発行作業が行われており、浮田はenoco周辺地域ゆかりの作家でもあります。今回、没後初めて浮田の作品を数十点まとめて展示します。子どもたちの自由な発想と表現を大切にし、自らも精力的に活動していた浮田のその仕事を改めてご覧下さい。8/8(土)には浮田ゆかりの人々によるトークイベントも開催します。

展覧会 & イベントレビュー

眼と心とかたち

「学芸員N」が出会った大阪府20世紀美術コレクション

(2015年3月20日~4月4日)

『眼と心とかたち 展』を拝見しました。このキュレーションをされた中塚さんはどんな気持ちと視点で、コレクションの膨大な数の中から、ピックアップされたのだろう…。また森口さんはその時代にはどんな事を考えながら制作を続けてきたんだろう…。そんな様々なことを頭のなかで並走させつつ、僕の身体はまるで『目』そのものになったように観ることが叶いました。僕は森口宏一さんの晩年の10年に期せずして関わらせて頂きます。師弟関係でもないのに懇意にしていただいたことは、僕の人生の中でも数少ない自慢の一つとなりました。先生は、個展の度に構想を練りに練り、試作を重ねに重ね、会期の1ヶ月前にはほとんどの準備を済ませていました。ある時は業務的に、ある時はまさに芸術家の眼差しで『急(せ)いて良い事など何一つありません。』と、せっかちな僕によく諭してくれたものです。言葉だけではなく、その姿勢は自身の仕事のあり方にきちんと反映されていました。だからやはり説得力がありました。僕は『眼と心とかたち 展』に配された作品群の中を、まだ納得の行かない様子でじっと見続ける森口宏一さんが、部屋の片隅でいらっしゃるような錯覚にとらわえると同時に嬉しくもあり寂しくもあり、複雑な気持ちになりました。ですが、その絡み合った感情は、時間を経る度に少しづつ温かみのある層をなして僕の中に欠落している何かを補ってくれているような心持ちでいます。若かりし頃の平面作品から立体へ移行されるところは森口先生の姿勢の現れ、他ならないと感じました。と、言うのもその時に下した決断を、自身で否定して、再構築する訳ですから。並大抵の精神力ではそういう作業は出来ないと思います。その立体がますます無機的に、感情の一切を排したようになった経緯がつぶさに感じられる、そんな空間に仕上がっていったと思います。観るとは何なのか?自分の頭で考えるとということはどういった作業なのか?改めて『問い』を頂いた機会になりました。そしてやはりこう思うのです。芸術に携わって生きていくと言うことは、人として『上等』になる為の有効な手段の一つなのだと。

鶴坂兼充

あじさか・かねみつ。71年鹿児島生まれ。大阪総合デザイン専門学校卒業後、フリーターを経て講師業に就職。独立後、作家の発表の場を作るべくiTohenというギャラリーを大阪市北区にて2003年に開設。同時にグラフィックデザインを兼務。現在に至る。

<http://www.skky.info/>



展覧会風景

photo:Nobutada Omote



展覧会風景

photo:Nobutada Omote



トークイベントの様子 ゲスト:建島哲氏
(2015年3月28日)



これまでのイベント

enoco WORKSHOP LABO.

作品写真の撮り方

(2015年5月9日)



美術品梱包、額装など美術に関わるうえで必要な技術を学ぶ、ややマニアックともいえるシリーズ、enoco WORKSHOP LABO. が開催されました。今回のテーマは、簡単に見えて実は本当に難しい、「作品撮影」です。美術作品や建築の撮影で活躍され、名和晃平氏主宰のSANDWICHの記録撮影なども手掛けられる表恒匡さんが講師を務めます。カメラの仕組みについてのレクチャーや、照明機材、レフ板などをを使った光の調整のしかたのデモンストレーションに統いて、実際に表さんの撮影の様子を見せていただき、さらにそれぞれ持参したカメラで展覧会を開催中のギャラリーの展示風景を撮影してみました。参加者の皆さんのお職業は、作家活動をされているアーティストやアートマネジメント関係者、さらにデザイン・インテリア関係の事務所勤務の方々、さらには橋をつくる会社(!)のスタッフの方まで、本当にさまざま。表さんへの質問も多岐にわたっていましたが、ひとつひとつ丁寧に回答される様子が印象的でした。

開催のたびに好評を頂いているenoco WORKSHOP LABO.ですが、今後も美術やデザインにまつわるさまざまな技術系ワークショップを予定しています。今後の展開にもご期待ください。

峯恵子／enoco企画部門

えのこdeマルシェ - 春の古本市!

(2015年5月16日)



enocoの新事業「えのこdeマルシェ」。記念すべき第1回開催の古本市は、当日はパラパラと雨が降るあいにくの天気にもかかわらず、1,000名を超えるお客様にお越しいただき大盛況でした。会場には、大阪・京都・兵庫から集結した古書店による特選本と、雑貨やコーヒー、ホットドック、お弁当などフードも充実完売続出。お買い物以外では、本物の野菜のスタンプでオリジナルエコバックを作ることのできるワークショップも大賑わい。当日ご来場のお客さまと一緒に完成させた9メートルの巨大ベンチは、完成したあとには、おしゃべりしたりご飯を食べたりするみんなの憩いの場となりました。これまでenocoに訪れたことのなかった近隣にお住いのご家族がたくさん来てくださり、本や雑貨をじっくり選んだりベンチに座っておしゃべりしたりと、思い思いのゆったりした時間を過ごしていただき、会場内はとてもいい雰囲気につつまれました。

次回は8月22日、真夏のナイトマルシェを開催予定です。美味しいごはんと素敵な音楽をご用意してお待ちしております。

吉原和音／enoco企画部門

西区 文化・芸術創造型ラウンドテーブル ROAD 249 PROJECT

(2014年4月～2015年3月)



ROAD 249 PROJECT

<http://www.city.osaka.lg.jp/contents/wdu560/249/>

enocoでは昨年度に引き続き、今年も大阪市西区役所が実施する「文化・芸術創造型ラウンドテーブル」のマネージメントを担当しました。これは西区の抱える様々な社会課題について、デザイナーや建築家といったクリエイターが集まって議論を重ね、創造的に解決していくこうというプロジェクトです。昨年は地盤の低い西区が巨大地震によって浸水する被害想定を、「浸水どうぶつのさし」にデザインしました(「ニュースレター2014_02」にて特集)。

今回のラウンドテーブルに与えられた課題は「路上駐輪」。坂がなく、人口も増えている西区は自転車の利用がとても多く、道路のあちらこちらに自転車が止められています。特に通学路の歩道に自転車があると、子どもたちが車道を歩くことになったり、ベビーカーが通れなかったりと非常に危険です。

西区に限らず大阪市では、迷惑駐輪対策に力を入れていて、放置自転車の撤去などに務めていますが、どうしてもイタチごっこになってしまいます。そこでラウンドテーブルでは、路上駐輪を単に「禁止」するのではなく、自転車のある暮らしの楽しさや、西区で気持ちよく暮らすライフスタイルを打ち出して、西区と自転車のファンを増やしていくことが、ルールの定着につながると考えました。

具体的には西区役所のWEBサイトに「ROAD 249 PROJECT」と名付けたページをつくって、地域の取り組みを紹介すると共に、自転車ラックが植物のプランターを兼ねる「グリーンサイクルparking」をデザインして、その図面をオープンデータとして公開しました。

しかし今回の課題であった「自転車」や「道路」は、行政内部でも複数の部署が関係するため、西区単体で判断できないことが多い、調整に時間がかかり、規制の壁も厚く多くの課題も見えました。今回の取り組みがきっかけとなって、「自転車の似合う街・西区」に向けた継続的な動きにつながればと思います。

事業は終了しましたが、WEBサイトは引き続き公開しています。ぜひチェックしてみてください。

高岡伸一／enoco企画部門



enoco のひとびと

enoco column 06
島にいて島をおもう



館長甲賀雅章の
アートの航海
~~~~~  
Vol.2



enocoに関わる創造人たちによるコラム。

大阪のアートプロジェクトを支えるコーディネーターの古谷さん、お願いします。

20代の頃、旅をしているうちに島旅に惹かれ、なるべく小さな島を巡ることに取り付かれていた時期を経て、此花区四貫島に事務所を構え、江之子島にあるenocoに入りすることになったのは「島」が多い大阪らしい話だと思う。

さて、四貫島というところはenocoから自転車で20分ほどのところにある下町で、現ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの場所にあった、日立や住友の重工業に従事する人たちのホームタウンだったそうだ。その工場がなくなり、工員たちも離れていったまちは梅田から車で15分の好立地にも関わらず、過疎・高齢化していった。この状況を打破すべく、地元の不動産会社がアーティスト



クリエイターと呼ばれる人たちはとにかく忙しい。なので会議の日程調整はとても大変です。3人ならまだしも、4~5名集めるとなると、これがまず決まらない。時には22時から会議なんてことも。アボを取る順番やタイミングは、結構コーディネーターの腕の見せどころだったりして。  
[企画部門チーフディレクター 高岡伸一]



enocoスタッフ出産ラッシュのバトンを受けて、今月から私も産休に入ります。妊娠してから日々止まらぬ食欲に戦って負け、戦って負けを繰り返しております。この夏はどうしても、アイスが手放せません…。お世話をうけた皆様、これからもどうぞ宜しくお願いします!  
[アートコーディネーター 福元葉子]



現在enoco1階エントランスでは「大阪府20世紀美術コレクションこの一点!」でご紹介した田中幸太郎による“花火による抽象写真シリーズ”を展示中です(7月末まで予定)。また8月からは、エントランスが「えのこじま仮説映画館」仕様になる予定。こちらもご期待ください!  
[アートコーディネーター 高橋真理子]

### 古谷晃一郎

アートコーディネーター

ふるやこういちろう

1975年大阪生まれ、演劇育ち。いくつかの文化系財団を経てフリーランスのアートコーディネーターとして活動。大阪府主催“おおさかカンヴァス”や山本能楽堂主催の新作能『水の輪』などのプロジェクトに関わる。

### 良いものは、どんどん取り入れる!

4月後半から5月の連休にかけては実際に忙しく、また充実した日々を過ごした。まさに毎日がアートシャワー。日常の厄介なことが見事に洗い流され、精神が浄化していくのがわかる。ベルリン滞在の一週間、毎日幼児・青少年向けのパフォーミングアート作品を鑑賞。夜は劇場やドイツならではのヴァリエティ・シアターで様々なジャンルのショーを観劇。幅も奥も深いベルリンのアートシーンであった。

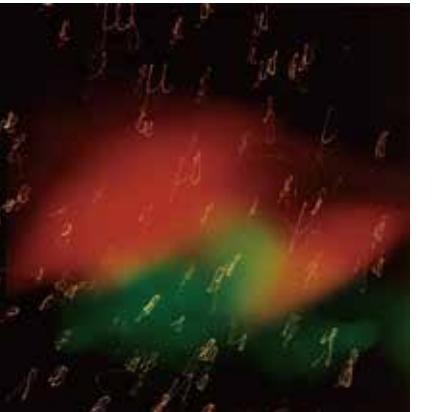
その後一旦静岡に戻り、ふじのくに=せかい演劇祭期間で今年から始めたフリンジ企画「ストレンジシード」ショーケースでの舞台挨拶を終えた翌日、韓国の安山市に飛んだ。フェスティバルの審査員を務めるためである。2005年にスタートしたAnsan Street Arts Festivalは、今や注目のフェスティバルに育っている。とにかく50位あるプログラム内容の幅広さが特長で、前衛的なフランスの作品から韓国の伝統的な作品、そして市民が参加できるプログラムなど実に多彩、客層も実



### 大阪府20世紀美術コレクション

1987年から2007年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀美術コレクション」。

総数およそ7800点の中から、enocoスタッフのおすすめ作品を毎号1点ずつご紹介します。



花火による抽象写真シリーズ

「スコア」田中幸太郎 (1901-1995)

制作年不明 | Cプリント | サイズ 432mm×436mm

今回は、写真家・田中幸太郎の“花火による抽象写真”シリーズから「スコア」をご紹介します。

田中は1955年より大阪・河内地域の人々の姿をモノクロで写し取る“日本の原風景・河内”シリーズを撮影する傍ら、カラー写真による“花火による抽象写真”シリーズの制作をスタートさせました。画家・ピカソが懐中電灯を使って空中にデッサンしている写真をきっかけに、光源を動かすのではなくカメラを動かすことで作品を作れないかと思いつき、試行錯誤の末、カメラの絞りを開放し、シャッターの代わりにレンズを手で覆い、三脚を使わず身体を動かすという方法を考え出しました。花火そのものを美しく撮影するのではなく、花火の光、色彩を造形の要素とし表現した本シリーズは、当時(1960年代)の写真界でタブーとされていたプレ、ポケを逆用し独自の世界観を獲得したことによって、

写真界、美術界より多くの関心が寄せられました。多重露光で幾重にも重ね写し出された花火たちの光跡は、夜空に打ち上げられた花火とはまた違った幻想的な世界を創り出しています。



高橋真理子  
enoco企画部門

この一点!

### オン★ザ★レビュー

enoco地下1階の古書店、オン・ザ・ブックス米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から、今の気分をあらわす1冊をご紹介いただきます。



世界のゲーム事典  
松田道弘著

将棋にオセロにカードゲーム、世界中で愛されている定番・派生形ゲームを約200種類も紹介した一冊です。中には「火星のチェス・ジェットン」とか「スター・アンド・ザ・フォートレス」という、SF映画ようなかっこいい名前のゲームもあったりして、非常に民心をくすぐる内容になっています。

話が少し逸れますが、少し前に「インダーステラー」という映画を見ました。相対性理論やワームホールといった宇宙科学をてんこ盛りにトッピングした、エンターテイメントぎりぎりのハードSF映画。一昔前は夢の世界のイメージでしたが、昨今の技術の進歩を目の当たりにしていると妙に現実味がありました。

プレステもWiiもスマホも面白いけれど、たまにはこんなオールドスクールなゲームで遊んでみようかな。酒を飲みながらのバックギャモンとか最高でしょ。

#### ON THE BOOKS

営業時間: 11:00-20:00(月曜日定休)

掲載の書籍は店頭・オンラインストアで

販売中 [www.on-the-books.info](http://www.on-the-books.info)





## えのこじまアート＆ライフ

### えのこじまの「くらし」

enocoのある江之子島は、2017年の終わりには、2棟のマンションと病院が建つ、あたらしいまちになります。その江之子島での「アート＆ライフ」活動とはどのようなものなのか、ディレクターで、000 Projectsのデザイナーでもある後藤さんに聞きました。

後藤哲也  
DECOBOCO



—— マンション街区で文化活動をやる目的は?

後藤 そもそも、大阪府の「江之子島地区まちづくり事業」コンペに提案された案なんです。マンション街区と総合病院、そしてenocoからなる新しいまちづくりのひとつの軸として、「アート＆ライフ(A&L)」活動が提案され、当選。後から参加した僕が現在、具体化のための活動を担当しています。

—— 具体的にはどのような活動を行っているのですか?

後藤 今は、すでに入居済みの「阿波座ライズタワーズマーク20」の一階にある「マークスタジオ」での活動が中心です。マンション入居者や地域住民を対象にした「DECO」活動と、江之子島にクリエイターを呼び込むための「BOCO」活動の二つからなります。enocoとの共同事業も行っています。

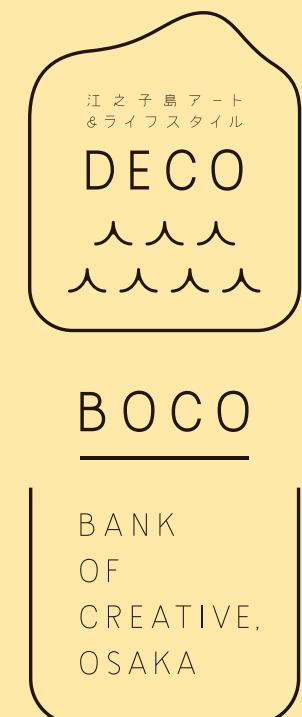
—— 「DECO」「BOCO」の名前の由来はなんですか?

後藤 内向きの活動と外向けの活動を「凸凹(デコボコ)」の関係性で表した名前です。DECOは、「decoration(デコレーション)」などの接頭辞「DE」と、「community」などの接頭辞「CO」を組み合わせた造語で、「コミュニティを彩る」といった意味を、そして、BOCOは「Bank Of Creative, Osaka」の略称で、いわゆるクリエイターと呼ばれる人たちを江之子島の場でつなごうという意図を込めています。

—— A&L活動はDECOCOの活動がすべてですか?

後藤 江之子島にはこれから、総合病院も建設されます。A&L活動は、DECOCO活動を含め、病院、enocoで行われる文化的な活動をつなぐ、まちづくりのハブとなる活動です。まだまだ軌道にのせられていないですが、今年後半からは活発化させていきたいと思っています。企画案も募集していますので、関心のある方は、積極的に提案してもらいたいですね。

enocoのある大阪市西区江之子島では、アートやデザインのちからで、くらしをより楽しむための文化活動「DECOCO(デコボコ)」が行われています。



阿波座を拠点に活動するデザイナー、増永明子さんの手によるDECO・BOCOロゴ。



月例で開催している勉強会「BOCO2020」。2020年までの大阪、そして、それ以降の大阪を考える。写真は、ドイツ人写真家、オリバー・ジーバーとカティア・ストゥーケをゲストに迎えた回。



enocoとDECOの共催イベント「ふしぎなenoco島をつくろう」。井上信太氏を講師に迎えた、こども向けワークショップ。



DECOCOの活動を手伝ってくれるスタッフを6月から募集しています。本誌が配布される頃には、もう採用が決まってしまっているかもしれません、ネットTAMIに求人を出していますので、間に合えば。  
<https://www.nettam.jp/career/detail.php?no=11518>  
[DECOCOディレクター後藤哲也]



6月のBOCOでは、創造都市の概念について佐々木雅幸氏にお話を伺いました。日常生活の中での個人のクリエイティビティと多様性が受け入れられる社会が、創造都市の基盤というお話を印象的。創造都市ネットワークジャパン(CCNJ)に、大阪府で初めて県市が加わったとのこと。嬉しいニュースです。[DECOCO スタッフ宮本典子]

### イベント情報

Facebookページ | [www.facebook.com/bankofcreativeosaka](http://www.facebook.com/bankofcreativeosaka)

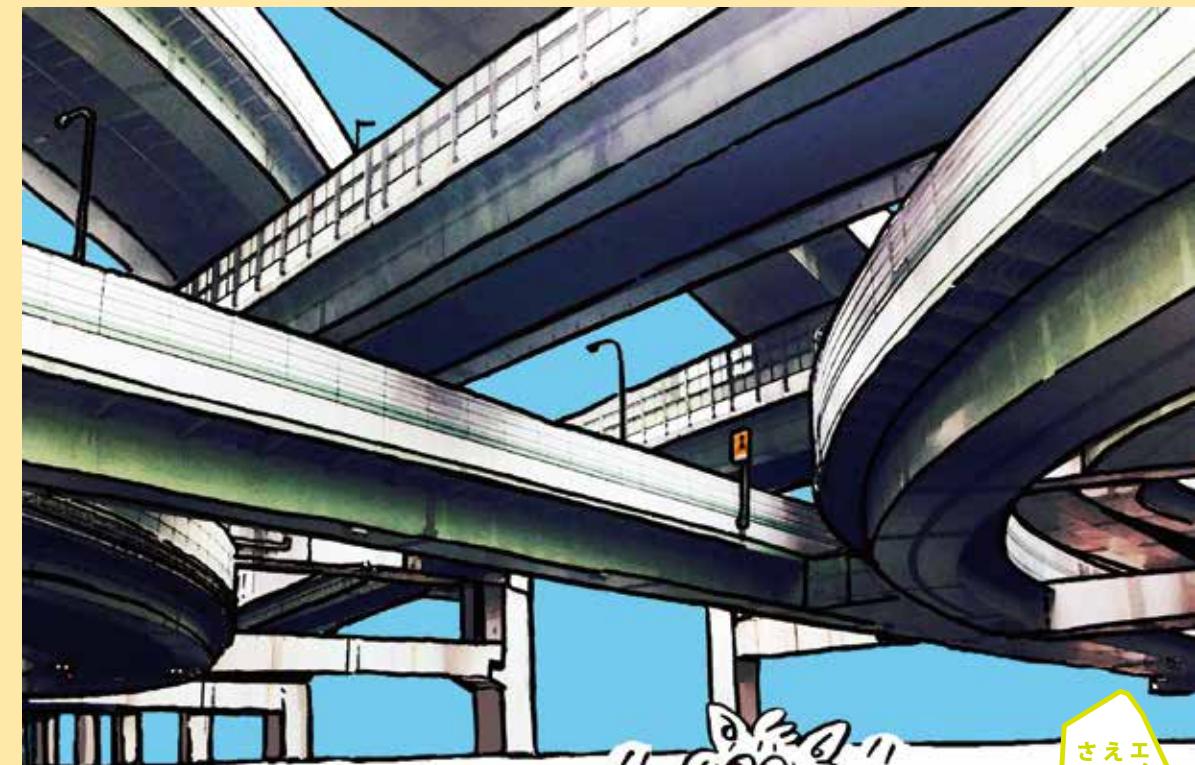


「バトンリレートーク(仮)  
奥山天堂さん【ミリバール】

日 時 | 7月16日(木)  
19:00-20:30  
会 場 | マークスタジオ

「出張6次元(仮)  
ナカムラクニオさん【6次元】

日 時 | 8月8日(土)  
※時間調整中  
会 場 | マークスタジオ



あわさ“ジャンクション の ナッコよさは  
マニアじゃなくとも ヨダレもの。  
ワシもまいにちきては ハアハアしとるで!”



えのこじま  
さんぽ  
エノケン  
阿波座  
ジャンクション  
ココ